

①実地体験（観察・見学含む）

【3月5日（木）】

○3歳未満児（Ecole Maternelle La Beaucaire）

フランスでは3歳から義務教育が開始されているが、この保育学校では3歳未満児から受け入れている。経済困難地域に設置されており、3歳からの義務教育に慣れておくために、フランス語以外の言語を話す家庭や共働きの家庭を対象に、市から認められた家庭の子供が通っている。

保育室には子どもが楽しみながら手指の発達を促すおもちゃが多くあり、「DEFI」（図1,2）という発達に応じて子どもがクリエイティブ課題に挑戦できる環境が整っていた。例えば、実際に鍵があり扉の開け閉めができる絵本や、形を造形する洗濯はさみ等、手指の発達を促せるかつ日常に即したおもちゃ沢山あった。子どもたちは教室を歩き回って自分が興味のあるおもちゃを使って、課題にわくわくした様子で取り組んでいた。

課題の設定されたおもちゃの近くには、個人の課題の進捗度合いを記録するシートがあり、達成した課題のシールを貼って発達の見える化をしていた。日によって保育者が変わったとしてもシートを見ることで子どもの発達の状況を読み取ることができ、スムーズな職員の連携を行えるようにしていた。手指を動かすという身体的発達だけでなく遊びの中で発語を促す目的もあり、フランス語に慣れ親しむことができるような3歳からの義務教育とのつながりを意識した環境づくり、関わり方を学ぶことができた。



図1 DEFI JE PINCE

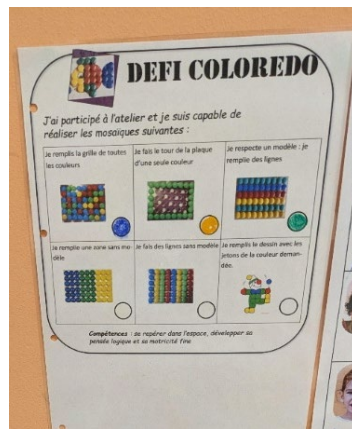


図2 DEFI COLOREDO

○年長組の「空間配置」見学（ville de Toulon ecole maternelle）

まず見学した午睡室には一人一人のスペースがあり、子どもによってはお気に入りのぬいぐるみやおもちゃを持って寝ることができるようにしていた。また、寝つきが悪い子には絵本を読むことができるスペースが用意されており、個人の睡眠リズムを意識した環境構成がされていた。

視察した5歳児クラスは、「言葉・数・絵」の3つの空間（クラス）があり、子どもたちはクラスを自由に移動できるようになっていた。子どもは一人一人スタンプシート（図3）を持ってクラスを歩き回り、それぞれ興味のあることに取り組むことでスタンプを貰える仕組みで、スタンプの個数によってご褒美がもらえるようになっている。このシートがあることで子どもは成果を視覚的に体感でき、教師は子どもの発達だけでなく興味・関心の傾向理解に繋がり、1つのクラスに偏りすぎないような援助や、職員間のスムーズな情報交換に繋がっている。

「言葉」のクラスでは、文字を並べる、文字の穴埋め（図4）をする、文字を書き写して発声する等の活動

を行っており、遊びの中で自然と言葉が発達する環境が整えられていた。「数」のクラスでは、指で数字を表す、さいころの目を書かれたもの（図5）を使い種類分けや数の合成をする等の活動を行っていた。「絵」のクラスでは、絵を描くだけでなく、図形の認識、絵カードを分ける等の活動が行われ、子どもの能力を伸ばす環境が整えられていた。

また、室内には飼育ゾーンがあり、ナナフシを卵から育てていた。生物を卵から育てる体験を行うだけでなく、男女の考え方を無くすジェンダーを考慮した目的もあり、よく考えられた活動であることを教えていただき、発見の多い見学となった。

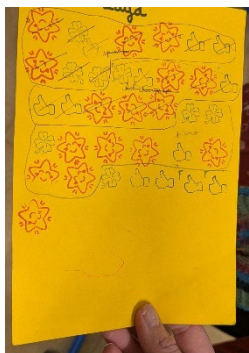


図3 スタンプシート

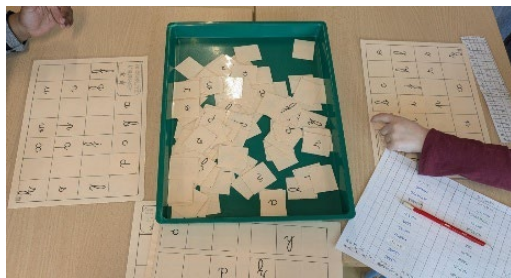


図4 文字の穴埋め

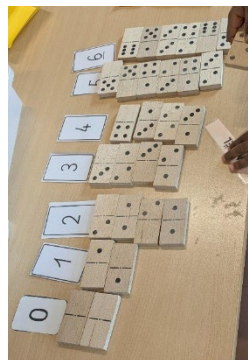


図5 さいころの目

#### ○全国保育学校教員協会の方々と面会(Ecole Maternelle Du Mourillon)

保育学校教員協会の方々と面会のために保育学校を訪問し、紙芝居「そばにいるよ～いっしょにあるいていこう～」を読んだり、平和の手遊びを一緒にしたりして子ども達と交流した。その後、折り紙を用いて子どもと一緒に折り鶴を折った。始めは折り方や言葉が思うように伝わらず悩む場面も多かったが、折り方を先に身振りで提示することで、子ども達はそれに倣って一生懸命に折り鶴を折ってくれた。折り鶴が完成すると、子ども達は折り鶴を持って園庭に出て遊んでいて、折り鶴を教えるやりがいを感じた。また、折り鶴を折る過程の折り紙の形を銃やアイスクリームに見立てる姿は、日本の子ども達と同じで、子ども達に対して親近感がわいた。言葉が伝わらない中でも同じ空間で折り鶴を作るという同じ活動を共有することで、子ども達との間に一体感を感じることができると貴重な体験となった。

この保育学校には「友情のベンチ (Banc de l'amitié)」(図6) が設置されていた。寂しい・悲しい気持ちでいるが、言葉で伝えることが難しいと感じるときに、子どもがこのベンチに座ることで「誰かと一緒にいたい」「助けが必要」というサインとなり、周りの子ども達は声をかけられる。子ども達の共感や助け合いの心を育むことを目的としている。この取り組みは子ども同士のコミュニケーションや関わりを自然と作ることに繋がるためこのような環境づくりの方法もあると学んだ。

この保育学校には大きな畑もあり、地域の農業高校と連携して作物を育てているそうだ。子ども達は高校生の大きな背中を感じられ、高校生は実際に作物の育成を教える経験ができる。保育現場と高校が連携する活動は、日本では見られないので驚きだった。



図6 友情のベンチ (Banc de l'amitié)



図7 平和の手遊びの実践

【3月6日（金）】

○屋外保育(Ecole Maternelle Du Micocoulier)

保育学校から公園に行って行う屋外保育に同行させていただいた。この保育学校は3.4.5歳児の混合クラスであり、公園への行き帰りは5歳児と3歳児がペアとなるようにしていた。またこの屋外保育は保護者参加も目的としている。保護者が参加することで、大人の目を増やす、保育内容の見える化をする、家庭での親子の繋がりを増やすことができる。そして子どもが交通ルールを学ぶだけでなく、親がルールの教え方を学ぶ機会にもなっている。(図8) 印象的だったのは、女の子がお父さんに抱っこを求めているが、お父さんは今はやらないよというような素振りをしていたことである。これは、保護者が自分の子どもだからと特別扱いせず、家とそうでない場所の場面分けや対応分けをしているのだなと感じた。自分の子どもだと特別扱いしてもおかしくないが、保護者が屋外保育に参加する意味や意図を理解しているからこそ適切な対応をすることができると考えた。また、課題を抱えている子には、保護者が常に1人ついており、子どもが自由にやりたいことをできるようにしていた。のびのびと自身の興味関心に従って活動をすることが、本来の課題を抱えている子への教育なのではないかと思った。

公園では滑り台などの遊具で遊ぶのではなく、公園ならではの自然を生かした活動を取り入れており、地面に木の枝を使って模様を書き写す(図9)、自由に体を動かすなどをし、ボール投げで体の動かし方を意識する活動を行っていた。実際に自然と一緒に身体を動かして体験的な活動をすることで、子ども達は生き生きと言葉のポキャブラリーや身体の使い方を学ぶことができていた。周りの環境の使い方次第で子どもの発達に大きな影響を与えることを実感した。屋外保育ではこの公園に1年を通して行くそうだ。1年間行くことで、季節の移り変わりに応じて同じ場所なのに異なった自然の様子を体験でき、子どもの五感を通じた学びに繋がっておりとても良い活動だと考えた。



図8 屋外保育の様子



図9 地面へ模様を書き写す様子

○教員養成大学、学生との交流 (Institut de Formation Public Varois des Professions de Santé)

教員養成大学を訪問させていただいた。大学内の図書館や体育館、教室を見学し、日本の大学との共通点や相違点を見つけたり、模擬授業で使用する教材を見せていただいたりした。フランスで同じ教員を目指す学生と紙芝居、平和の手遊び、折り紙を通して交流した。折り鶴を作る中で英語や身振り手振りを介してコミュニケーションを取りながら折り鶴を完成させた。お互いに言語の違いがあっても伝えようとする意志や相手と笑顔で関わる中で楽しく折り鶴を作ることができたため、姿勢の持ち様によって様々なつながりが生まれると感じた。(図10)



図10 集合写真

【3月9日（月）】

○ヴァール県教育庁訪問(DSDEN du Var)

教育庁を訪問させていただき、教育長や視学官の方々とお会いした。日本の平和教育・保育の取り組みについて情報共有するだけでなく、フランスの教育と日本の教育の現状や抱えている問題を共有した。お互いに教育面で抱えている問題があるため情報共有することで今後の教育に繋ぐことができる。このような場所に訪問できることは、日本でもなかなか経験することができないため緊張したが、様々なお話を聞くことができ、貴重な経験だった。(図 11)



図 11 集合写真

○子育て支援機関 (Ecole Maternelle Les OEillet)

この保育学校の子どもたちと紙芝居、平和の手遊び、折り鶴をした。(図 13)紙芝居を通して平和に対して真剣に考え受け止める子ども達の姿が見られた。また、言語の壁がある中でも折り方を見せたり、擬音語を使いながら折り方を教えたり、複雑なところや苦戦している場面では一緒に折るなどの援助をしながら折り鶴を作った。子ども達は完成した折り鶴を嬉しそうに飛ばし、大事に持ち帰る姿が見られた。

5~6人1グループになり教えていたが、子ども達が苦戦するところはほとんど同じだったため、順番に教えていたが、教えてあげるまではすごく不安そうな顔をしていた子どもたちだったが、折れるようになるとすごくニコニコした明るい表情に変わっており、素直でかわいいなと思った。子どもによっては、全部私達に折ってほしいという表情の子どもがいたり、少し教えたら後は自分でやると言い、自力で頑張っている子どももいたり、自分が折り方を理解したら、隣にいる友達に教えてあげる子どももいたり色々な子どもの姿を見ることができ、興味深かった。

言葉の壁を感じたとしても折り鶴や平和の手遊びを通して、平和について伝えることができると学んだ。これからも多くの子ども達に言葉だけではない方法で、平和を伝えていきたいと思う。



図 12 園庭のキャップ壁画



図 13 平和の手遊び実践

## ②文化体験

【3月7日（土）】

### ○Chapelle Norte-Dame de Beauvoir

プロヴァンス県にあるフランスで最も美しい村の1つ、ムスティエ＝サント＝マリーの断崖絶壁の上に建つ歴史的な礼拝堂へ訪れた。ここでは、村のシンボルである黄金の星を見たり、美しいステンドグラスを見たりした。礼拝堂へ訪れるには、262段の石段(図14)を登らなくてはならないが、街全体が広がる木々や湖、プロヴァンスの伝統的な家屋(図15)など、最も美しいと言われる理由が分かる絶景が広がっており、疲れを忘れるものだった。



図14 礼拝堂への石段



図15 プロヴァンスの伝統的な家屋

【3月8日（日）】

### ○ペタンク

フランスの伝統的なスポーツであるペタンクを体験した。ペタンクという言葉は、プロヴァンス地方の方言で「足をそろえて」という意味の「pieds tanqués」に由来している。ルールは、目標球（ビュット）に、ブルー（鉄ボール）を投げ合って、相手より近づけることで得点を競う。勝利したチームの代表者が線の引かれたところからビュットを投げ、目標となる位置を決めるが、6m以上離れていないといけなかったり、投げた場所が坂や壁の近くだと今後のゲームを左右したりするため、ビュットを投げるのも考えながらゲームをした。また、ビュットは、木でできているため投げやすいが、ブルーは鉄でできているため、重く、始めた時は、遠くに投げることも手こずり、ましてやビュットに近づけることは大変だった。しかし、何ゲームもしていくとコツを掴み、ビュットの真横に投げることができた時はすごく楽しく、嬉しかった。

日本では遊ぶことのできないペタンクを現地の方々と一緒にすることができたことは、すごく貴重な経験であり、用意していただけたことに感謝している。



図16 ブール



図17 ビュットとブルー



図18 ゲームの様子

【3月10日（火）】

○ノートルダム・ドゥ・ラ・ガルド寺院

マルセイユの丘の上にそびえたつノートルダム・ドゥ・ラ・ガルド寺院を訪れた。寺院内の宗教画やステンドグラスは精密な造りで感動した。また、教会の中に一步踏み入れると静けさに少し緊張を覚えたが、祈りや考え事するにはこの静けさの中で自分自身と向き合い、心を落ち着かせるには相応しい場所であると感じた。早朝に行ったことで、日の出と寺院、寺院からの風景を楽しむことができた。



図 19 寺院



図 20 寺院の中の様子



図 21 寺院からの景色

【研修場所】 乳児保育所 1 校、保育学校 4 校、教職大学院 1 校、ヴァール県教育庁

【紙芝居・折り紙実践】 計 4 回